１０月予報（全10枚）

病防第３３号
令和８年（２０２６年）９月３０日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察予報について（送付）

このことについて、令和８年度（２０２６年度）病害虫発生予察予報第７号を発表しましたので送付します。

予　　報

令和８年度（２０２６年度）病害虫発生予察予報第号（１０月予報）

Ⅰ　主要な病害虫の発生予想概要

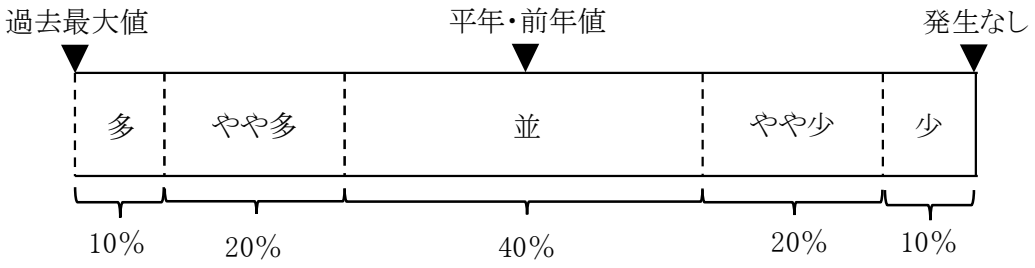
作　物	病害虫名	９月の発生状況		１０月の発生予想		
		平年比		平年比		前年比
大豆	ハスモンヨトウ		並		**並**	**やや多**
	吸実性カメムシ類		並		**やや多**	**並**
茶	カンザワハダニ		やや多		**並**	**多**
かんきつ	ミカンハダニ		やや多		**やや多**	**多**
果樹全般	果樹カメムシ類		やや多		**並**	**並**
トマト	灰色かび病	夏秋作	やや多	**夏秋作**	**やや多**	**多**
	葉かび病	夏秋作	やや少	**夏秋作**	**並**	**並**
	すすかび病	夏秋作	やや少	**夏秋作**	**並**	**並**
	黄化葉巻病	冬春作	並	**冬春作**	**やや多**	**並**
	トマトキバガ	夏秋作	－	**夏秋作**	**－**	**やや多**
		冬春作	－	**冬春作**	**－**	**やや多**

作　物	病害虫名	９月の発生状況	１０月の発生予想	
		平年比	平年比	前年比
いちご	炭疽病	育苗ほ　並	**本ぽ　並**	**並**
	ハダニ類	育苗ほ　並	**本ぽ　並**	**並**
うり科野菜	退緑黄化病	並	**並**	**並**
果菜類	コナジラミ類	冬春作　やや多	**冬春作　やや多**	**並**
	アザミウマ類（いちご除く）	並	**並**	**並**
野菜類全般	ハスモンヨトウ	並	**並**	**並**
	オオタバコガ	並	**並**	**並**

Ⅱ　その他の病害虫の発生予想概要

部門	１０月の発生予想	（作物）病害虫名
	平年比	
野菜類	多	**（野菜類全般）シロイチモジヨトウ**
	並	**（トマト（高冷地））黄化葉巻病** **（いちご）うどんこ病** **（秋メロン）べと病** **（野菜類全般）アブラムシ類**

※ 発生程度は平年（過去 10 年間の平均値）・前年と比較し多～少の５段階で示している。



Ⅲ　１０月の主要な病害虫の防除対策と留意点

大豆

１）共通事項
・病害虫防除所ホームページの「調査データ」（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載している各種トラップによるハスモンヨトウと吸実性カメムシ類の誘殺状況を参考に早期発見、早期防除に努める。
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

２）虫害
・ハスモンヨトウに対しては、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害により白色化した被害葉（白変葉）が認められたら防除を行う。
・吸実性カメムシ類に対しては、開花終期から子実肥大期において、７～10日おきに２～３回の薬剤防除を行う。また、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシに対するピレスロイド系薬剤（IRACコード：３Ａ）の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。

茶

１）共通事項
・秋季の病害虫の発生は、翌年の発生に大きく影響するので、整枝と適期防除に努め健全な秋芽を確保する。
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。薬液が葉裏まで十分に届くよう規定量を丁寧に散布する。

２）病害
・残葉に炭疽病が発生していた園では秋芽でも発生しやすいため、整枝時に被害葉のせん徐に努める。

３）虫害
・ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺消長を病害虫防除所ホームページの「調査データ」（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載するので、これを参考に適期防除に努める。
・チャノコカクモンハマキは、新葉・旧葉の区別なく発生するので、発蛾最盛期の７～10日後（若齢幼虫期）に薬剤散布する。
・干ばつの影響が大きかった園では秋芽でもカンザワハダニによる被害が増えやすいため、園をよく観察し、低密度時からの薬剤防除に努める。
・ツマグロアオカスミカメの発生源となるキク科雑草の除草に努める。

果樹

１）共通事項
・各種トラップにおける果樹カメムシ類、ナシヒメシンクイの誘殺状況を病害虫防除所ホームページの「調査データ」（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載し、随時更新するので、これを参考に園地を見回り、早期発見、早期防除に努める。
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

２）病害
・かんきつでは、黒点病の保菌率が高い径５～10㎜の枯枝をせん除する。枯枝や貯蔵病害の発病果は園外に処分する。
・なしでは、収穫後から落葉期にかけて黒星病の薬剤防除を行う。
・かんきつのかいよう病に弱い品種やかきの炭疽病が発生しやすい園では、台風接近時など強い風雨が予想される前に予防散布を行う。
３）虫害
・平年より気温が高く推移しているため、害虫の発生も平年より早めに発生する可能性が高いので、発生状況をよく観察し、適期の防除に努める。
・かんきつでは、ミカンハダニ雌成虫の寄生葉率が30～40％または寄生頭数が10葉当たり５～10頭に達したら薬剤防除を行う。
・果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。

野菜

１）共通事項
・チョウ目害虫の発生状況については、病害虫防除所ホームページの「調査データ」（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
・これから定植するほ場では、病害虫をハウス内に持ち込まないよう健全な苗を使用する。育苗期後半から定植時に登録のある薬剤を使用し、初期防除に努める。
・株が大きくなり葉が繁茂すると、葉裏に薬剤が付着しづらいため、薬剤が葉裏にも十分かかるよう注意しながら散布する。
２）病害
・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。トマト・メロンでは、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスに感染する。また、他のウイルス病にも罹病するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。
３）虫害
・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
・いちごでは、ハダニ多発後は防除が困難になるので、早期発見と早期防除の徹底に努める。対策の詳細と薬剤の選定については、令和７年５月１日付け発生予察技術情報第１号（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf）を参考にする。
・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫に登録のある薬剤防除を行い、ハウス内の密度を抑制する。対策の詳細や薬剤の選定については、令和８年４月１日付け農業革新支援センター情報「トマトキバガに対する防除対策について」（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/240009.html）を参考にする。

ＦＡＸ版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。
https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html

Ⅳ　主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。

※ 根拠末尾の（＋）は発生を助長する要因、（－）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう１か月（９月26日～10月25日）の気象予報　福岡管区気象台発表

要　　素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気　　温	１０％	３０％	**６０％**
降 水 量	**４０％**	３０％	３０％
日照時間	２０％	**４０％**	**４０％**

大豆

１）ハスモンヨトウ

（１）予想発生量　平年並

（２）根拠

◎　９月の定点調査（14 か所）では、ヨトウムシ類の食害株率 33.7%（平年 45.3%）、幼虫数 7.7 頭／10 株（平年 6.7 頭／10 株）と平年並の発生であった（±）。

○　フェロモントラップによる９月第５半旬～８月中旬（10 月発生の前世代成虫）の誘殺数は、合志市で平年比少、阿蘇市で平年比やや少、八代市、山都町で平年並であった（－）。

○　防除員報告（５地域）によると、９月の発生は平年並～やや少であった（±）。

◎　向こう１か月の気温は平年より高く（＋）、降水量はほぼ平年並の見込みである（±）。

２）吸実性カメムシ類

（１）予想発生量　平年比やや多

（２）根拠

◎　９月の定点調査（14 か所）では、寄生頭数 0.4 頭／10 株（平年 0.5 頭／10 株）と平年並の発生であった（±）。

○　合志市（生産環境研究所）の予察灯によるアオクサカメムシとミナミアオカメムシの９月第１～５半旬の累積誘殺数は、22 頭（平年 54 頭）と平年比少であった（－）。

○　防除員報告（５地域）によると、９月の発生は平年並であった（±）。

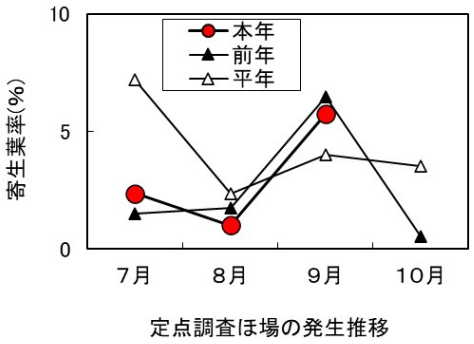
◎　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

茶

1）カンザワハダニ
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　９月の定点調査（８か所）では、寄生葉率 2.3%（平年 3.7%）と平年並の発生であった（±）。
○　御船町（茶業研究所）の９月第５半旬の調査では、寄生葉率 0.0%（平年 8.8%）と平年比少の発生であった（－）。
◎　防除員報告（５地域）によると、９月の発生は平年比やや多～並であった（＋）。
○　向こう１か月の気温は平年より高く（＋）、降水量はほぼ平年並の見込みである（±）。

かんきつ

1）ミカンハダニ
（1）予想発生量　平年比やや多
（2）根拠
○　９月の定点調査（22か所）では、雌成虫の寄生葉率5.7%（平年4.0%）、寄生頭数約3.8頭／10葉（平年1.9頭／10葉）と平年比やや多の発生であった（＋）。
○　宇城市（果樹研究所）の無防除樹における９月第５半旬の調査では、寄生葉率５%（平年 12.6%）と平年比少の発生であった（－）。
◎　防除員報告（７地域）によると、９月の発生は平年比やや多～並であった（＋）。



定点調査ほ場の発生推移

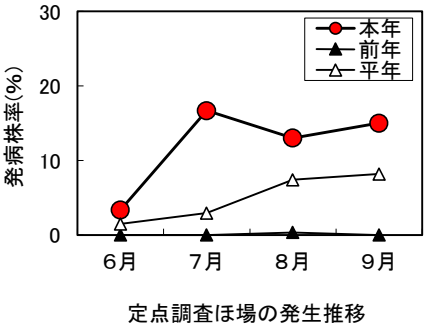
◎　向こう１か月の気温は平年より高く（＋）、降水量はほぼ平年並の見込みである（±）。

果樹全般

1）果樹カメムシ類
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　９月上旬のヒノキ結果枝（６か所）おける寄生数は、1.3 頭／５枝（平年 5.3 頭／５枝果）と平年より少なく、８月上旬の 15.0 頭／５枝、８月下旬の 3.3 頭／５枝から連続して減少している。球果上の１果当たり口針鞘数は、９月上旬時点で最大 29～80 本と離脱開始の目安となる平均 25 本を超えており、すでに大半の新世代成虫が山林から離脱を終えていると考えられる（－）。
◎　予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、８月下旬から９月中旬にかけて合志市と天草市で大幅に減少、宇城市では横ばいで推移している（－）。
◎　防除員報告（12地域）によると、９月の発生は平年比やや多～やや少であった（＋）。
○　向こう１月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

トマト

1）灰色かび病
（1）予想発生量　夏秋作：平年比やや多
（2）根拠
◎　9月の定点調査（6か所）では、茎葉での発病株率15.0%（平年8.2%）、果実での発病株率0.7%（平年0.1%）と平年比やや多の発生であった（+）。
◎　防除員報告（2地域）によると、9月の発生は平年比やや多～並であった（+）。
○　向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである（±）。

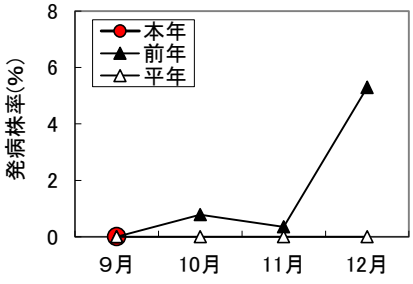


定点調査ほ場の発生推移

2）葉かび病
（1）予想発生量　夏秋作：平年並
（2）根拠
○　9月の定点調査（6か所）では、発病株率0.3%（平年30.3%）と平年比少の発生であった（－）。
◎　防除員報告（2地域）によると、9月の発生は平年並であった（±）。
○　向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである（±）。

3）すすかび病
（1）予想発生量　夏秋作：平年並
（2）根拠
○　9月の定点調査（6か所）では、発病株率53.7%（平年71.7%）と平年比やや少の発生であった（－）。
◎　防除員報告（2地域）によると、9月の発生は平年並～やや少であった（±）。
○　向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込みである。

4）黄化葉巻病
（1）予想発生量　冬春作：平年比やや多
（2）根拠
○　9月の定点調査（4か所）では、発病株は確認されず（発病株率平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。
◎　9月の定点調査（4か所）では、コナジラミ類の寄生葉率0.5%（平年1.7%）と平年並の発生であった（±）。
○　防除員報告（3地域）によると、9月の発生は平年並であった（±）。
◎　向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、コナジラミ類の活動に好適な条件である（+）。



定点調査ほ場の発生推移

5）トマトキバガ
（1）予想発生量　夏秋作：前年比やや多
　　冬春作：前年比やや多
（2）根拠
◎　フェロモントラップによる誘殺数は、令和４年の調査開始以来、年々増加している。８月第５半旬～９月中旬（10 月発生の前世代成虫）の誘殺数は、前年比やや多の発生であった（＋）。

トマトキバガの誘殺状況（９月※）

市町村名	本年（頭）	前年（頭）	前年比（%）
玉名市	89.3	45.8	195
熊本市	31.7	16.3	195
宇城市	95.9	45.3	212
八代市	110.9	11.3	978
阿蘇市	590.8	777.1	76
合志市	69.0	49.0	141

※玉名市、熊本市、宇城市、八代市：８月第５半旬～９月第４半旬の総数
　阿蘇市、合志市：８月第５半旬～９月第５半旬の総数

いちご

1）炭疽病
（1）予想発生量　本ぽ：平年並
（2）根拠
◎　９月の定点調査（６か所）では、発病株は確認されず（平年 1.1%）、平年並の発生であった（±）。
◎　防除員報告（６地域）によると、９月の発生は平年並であった（±）。
○　向こう１か月の降水量はほぼ平年並の見込みである（±）。

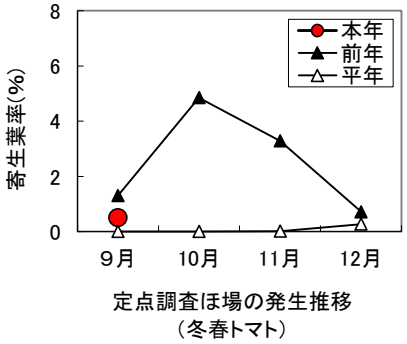
2）ハダニ類
（1）予想発生量　本ぽ：平年並
（2）根拠
◎　９月の定点調査（６か所）では、寄生葉率 6.7%（平年 6.6%）と平年並の発生であった（±）。
○　防除員報告（３地域）によると、９月の発生は平年比やや多であった（＋）。
○　向こう１か月の降水量はほぼ平年並（±）、気温は平年より高い（＋）見込みである。

うり科野菜

1）退緑黄化病
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　防除員報告（６地域）によると、９月の発生は平年比やや少～並であった（±）。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みであり、コナジラミ類の活動に好適な条件である（＋）。

果菜類

1）コナジラミ類
（1）予想発生量　冬春作：平年比やや多
（2）根拠
○　９月の冬春トマトの定点調査（４か所）では、寄生葉率 0.5%（平年 1.7%）と平年並の発生であった（±）。
◎　防除員報告（３地域）によると、９月の発生は平年比やや多～並であった（＋）。
◎　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。



定点調査ほ場の発生推移
（冬春トマト）

2）アザミウマ類（いちご除く）
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　防除員報告（７地域）によると、９月の発生は平年並であった（±）。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

野菜類全般

1）ハスモンヨトウ
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　９月の夏秋トマトと冬春トマト、いちごの定点調査では寄生株は確認されず（寄生株率平年 夏秋トマト 0.3%、冬春トマト 0.0%、いちご 0.5%）、平年並の発生であった（±）。
○　フェロモントラップによる８月第５半旬～９月中旬（10 月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年並、阿蘇市で平年比やや少、山都町で平年並、合志市で平年比少であった（－）。
◎　防除員報告（14 地域）によると、９月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

2）オオタバコガ
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　９月の夏秋トマトの定点調査では寄生株率 0.3%（平年 0.0%）、９月の冬春トマトの定点調査では寄生株は確認されず（寄生株率平年 0.0%）、平年並の発生であった（±）。
○　フェロモントラップによる８月第５半旬～９月中旬（10 月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年比多、阿蘇市で平年比多、山都町で平年比やや多、合志市で平年比少であった（＋）。
◎　防除員報告（８地域）によると、９月の発生は平年並であった（±）。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

Ⅴ 農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

Ⅵ その他

本情報は病害虫防除所のホームページにも掲載しています。

病害虫発生予察情報に関する詳細な内容等については、病害虫防除所（農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490）にお問合せください。



©2010 熊本県くまモン